

## 四季節（フォーシーズン） 後編

入野 れん

<主な登場人物>

**クリストフ・デルフィート**：EFFO（世界連邦設立機構）<sup>プレジデント</sup>最高責任者。EFFO内の通称はプレジ。フランスの国会議員でもある。フランス・ノルマンディー出身。1986年時点で31歳

**ルディアン・ライツ**：EFFONo.2で情報部長。通称チーフテン。ソ連エストニア共和国出身。現在はスイス国籍。同27歳

**ノエル・コルト**：シャンソン・クラブの歌手。ルディアン・ライツと結婚、長男シェロードを出産。フランス・ランゲドック出身。同26歳

**リチャード・ケン・オーツ**：EFFO幹部会付き職員。日系アメリカ人。米国ニューイングランド出身。同23歳

**ラヴレンティ＝スヴェルドローフ**：EFFO幹部の一人。KGB（ソ連国家保安省）中佐で、ゴルバチョフ書記長の最も若い側近。ソ連ウクライナ共和国出身。同29歳

**ミハイル＝ゴルバチョフ**：ソ連共産党書記長。ソ連ロシア共和国出身。同55歳

初出／すんからいし6(1991年8月発行)

一九八六年八月 五

「こちらです」

ソ連ウクライナ共和国リボフ市郊外の寒々とした病院の一室で、医者は遺体の頭部にかけられた白い布を取り払った。その下には、ルディアン・ライツが昨日の朝、別れたばかりの顔があった。

「ラーヴリヤ……」

レースは終わった。二十四時間前に一通の電報を受け取って以来、ルディアンは電話をかけ、車のハンドルを握り、ソ連大使館の階段を駆け上がり、息を切らせながら事情を話し、自分がその目で確認していない、という一筋の希望にすぎりながら飛行機に乗り、そ

ルディアンはレースに負けたのだ。

「……死因は？」

「後ろからマカロフ型短銃により銃弾二発が撃ちこまれています。致命傷は左胸、心臓のすぐ下の大動脈を破り、肋骨をかすめての貫通傷。直接の死因は、二つの銃傷からの出血多量です」

医者は事務的にそっけなく答えた。

ルディアンはラヴレンティの顔に触れた。そして生前、会うたびにそうしたように、彼の灰色の髪をかきあげながら冷たくなった頬にスラブ式にキスした。

「現場に行かれますか？」

ルディアンは顔を上げた。彼をここまで案内してきたラーヴリヤ——ラヴレンティ——スヴェルドローフ中佐の部下、ゲイダル・オグ

ルイが青い顔をして立っていた。

二人は二〇分後、病院から一〇キロほど離れた牧草地帯に立っていた。ゆるやかにうねる大河、その彼方に線路。

警察とKGBの現場検証はすでに終わっていた。昨夜のうちに雨が降ったので、ラーヴリヤの身体を引き上げた場所についていた血は洗い流されていた。

「遺体の発見時の状況は？」

葦の茂る河のふちに立って、ルディアンが聞いた。

「昨日午後五〇分ごろ、あの鉄橋付近から銃声が数発聞こえ、それを聞き付けた羊飼いの少年が来てみると、川の岸辺に三十前後の男——スヴェルドロフ中佐が血を流して横たわっていたそうです。少年が岸へ運び上げた時には、すでにこと切れていて……」

ゲイダルの語尾がわずかに震えた。ルディアンは自分より二つ、三つ年下であるう小柄なアジア系の青年の肩を軽く叩いた。

「その後、羊飼いは警察に連絡し、病院に運ばれた後、所持品——パスポートから身元が判明し、KGBルートでモスクワに連絡が入ったのです」

「KGBルートとは？」

「警察……いや、ソ連の主な組織にはどこでもKGB連絡役がいて、あらゆる有益な情報を集め、彼らは通信網においても優先的に用いることができます。チェルノブイリでもこのKGBルートがなければ、対策はもつと遅れたでしょう」

ラーヴリヤが対策に駆け回ったあの事故から四カ月しかたっていなかった。そしてチェルノブイリ発電所から五〇〇キロあまりしか離れていないこの河も、目に見えない放射能に汚染されているに違いない。

河の彼方から列車の音が近づいてきた。ルディアンはとっさに時計を見た。おそらく昨日ラーヴリヤが乗っていたのと同じ列車、同じ時刻。十二両編成の急行列車は重奏な音を響かせて二人に近づき、露骨なドップラー効果をおこして遠ざかつて行った。

「……犯人と目される男たちは、列車からあの草原に飛び降り、そのまま姿を消したそうです。現在もKGBと警察が行方を追っています……」

ゲイダルもオグレイがそこまで言った時、二人のいる川岸の近くに車が止まった。そしてやせて銀ぶち眼鏡をかけた男が降りてきて、ルディアンに身分証を見せた。

「KGB第三総局のアントーノフといいます。リボフまで御同行いただけますか」

「アントーノフ少佐！ この方は……」

彼と顔見知りらしいゲイダルがあわてて説明しようとしたのを、ルディアンがさえぎった。

「いいでしょう。ただ、私はスイス国籍を有する外国人であることをお忘れなく」

アントーノフ少佐はルディアンを近くの警察署らしい建物へと案内した。ほどなくコンクリートで囲まれた一室に招き入れられる。

「ルードヴィヒ・R・ノイルドバルド、スイス国籍——です」

ルディアンのパスポートを見ながら、アントーノフ少佐はKGB将校というよりは、白晝の文学青年、といった面持ちで尋ねた。

「はい」

「ロシア語がお上手ですね」

「——アントーノフ少佐、つまらないことで時間をつぶすのはよしましょう。私の来歴などとおつきにご存じでしょう。何をお尋ねに

なりたいのです？」

ルディアンがラヴレンティを通してゴルバチョフ書記長に西側についての情報提供を行っていることなど、KGB内では周知のことだった。アントーノフ少佐はルディアンを見つめ、華奢な銀ぶち眼鏡をはずした。

「……昨日までパリにいたあなたが、我々より先にスヴェルドローフ中佐の死を知ったのはなぜですか？」

「昨日の午後、一通の電報を受け取りました。これです」

ルディアンは胸ポケットからうす青い電報を取り出した。アントーノフ少佐はそれを受け取り、開けた。

『ポトボルコヴィニクイエスチヴォオバスノスチ  
「チユウサノミニキケンアリ」』

発信はパリ中央電報局。差出人名はない。ロシア語だが、ロシア文字をアルファベットに置き換えている。ロシア語に通じている人間でなければ、意味はもとより何語なのかわからない、暗号めいた電報だった。

「それで？ これを受け取ってからどうしたのです？」

アントーノフ少佐が聞いた。

「ラーヴリヤ：スヴェルドローフ中佐のことだと直感しました。その朝早く、私は彼がリポフの実家に帰るといっているので、ポルト・マイヨーで会い、空港バスに乗るのを見送ったのです。その時に何かしら頭に引っかかっていたものが、この電報を見てはつきりわかったのです。スヴェルドローフ中佐は非常に危険な状態にある——任務から解かれ、銃も携帯せず、単独行動で、しかも行き先が決まっている——襲撃するには、またとないチャンスです」

「誰が？」

アントーノフ少佐の切り込みに、ルディアンは一瞬たじろいだ。

「私は知りません。推測することはできませんが」

ルディアンはすぐに落ち着きを取り戻し、アントーノフ少佐を見つめた。

「この電報の送り主に心当たりは？」

「特定の者では、ありません。初め、一瞬、スヴェルドローフ中佐の部下かと思ったのですが、それでは辻褃が合わない」

アントーノフ少佐は、黙って白い手袋をした手で電報をいじった。

ドアをノックされ、制服姿の軍人が顔を出した。

「少佐、ちよつと」

アントーノフ少佐は立ち上がり、軍人と二言三言しゃべると、ルディアンの方を振り返った。

「お時間を取らせました。もう結構ですので、お引き取りください」

ルディアンは、挨拶すると外に出た。建物の前で、ゲイダルが待っていた。

「ガスパージン……」

「何もされなかった。大丈夫だ」

ゲイダルの心配そうな顔を見て、一瞬ルディアンはリチャードと印象が重なり、ぞんざいな言い方で言った。

「……中佐の葬儀は、明日、実家で行われるそうです。出席なさいますか？」

「さしつかえなければ、是非」

ルディアンはゲイダルの肩を叩いた。ラーヴリヤがゲイダルたちにとつてもたぐいまれな上司であったことは、ルディアンには痛いほどわかっていた。

白樺の林が突風に揺れる。ルディアンは白っぽい色の空を見上げた。

痛手だった。

ラーヴリヤと出会って五年。何度も共に生死の境をかくぐつてきた。ゴルバチョフのペレストロイカもグラスノスチも新思考外交も、そして世界政府をつくるE F F O（世界連邦設立機構）の試みも、始まったばかりだった。ラーヴリヤと負うはずだった夢――。

ラーヴリヤが負うはずだった責任まで、自分にかかってくるのだろうか。

光は明るく輝いていたが、風は肌に冷たかった。

八月 六

「こんな時間まで、ごめんさい」

ノエル・コルトは仕事着であるイブニングドレスにショールを引つ掛けたなりで、すっかり顔なじみになったE F F Oの託児所職員に言った。壁の時計は、すでに十二時過ぎをさしている。

「いいえ、夜遅くまでお仕事大変ですね」

ノエルより二、三歳若い職員はにこやかに、よく眠っている赤ん坊をノエルに手渡した。ノエルが挨拶して託児所を出ると、外でルディアンが待っていた。

三日ぶりに見るルディアンは、濃い色の背広が闇に溶け、黒い髪にふちどられた白い肌がさえざえとして一瞬、人間以外のなものかのように見えた。

「ルディ！」

「乗って」

ルディアンが車のドアを開けた。ノエルは助手席に乗り込み、ルディアンはハンドルを握った。

「ルディ！」

ノエルは、夫の顔を見て呼んだ。ルディアンはハンドルに手をおいたまま首をのぼしてノエルと唇を合わせ、そしてノエルの腕の中

で眠っているシエロードの頬にキスした。ルディアンは車を発進させた。少しくすんだ空で星がかすかに点滅している。

「ノエルは赤ん坊の寝息を聞きながら、ラーヴリヤについて切り出す言葉を考えた。

ラーヴリヤのお葬式はどうだったの、ではストレートすぎる。ラーヴリヤの死については、ルディアンの部下から連絡が入っていた。それはルディも知っているはずだった。リボフはどうだったの？――ラーヴリヤのことに触れずにいるのも不自然だった。ノエルが適当な言葉を考え付かないうちに、車はバレンヌ街のアパートについた。

ルディアンが、ドアを開ける。

「ルディ！」

階段を上がりかけたルディを呼び止めた。

「ラーヴリヤは？」

「……箱に入れられて、土に埋められた」

それはラーヴリヤの葬儀の場で、ラーヴリヤの四歳か五歳の従弟が発した言葉だった。ねえ、どうしてラーヴリヤを箱に入れるの？ねえ、どうしてラーヴリヤを土に埋めちゃうの？ラーヴリヤを慕っていた幼子に、その子の母親が何と言ってなだめたのかは、聞き取れなかった。

ルディアンは闇の中で、シエロードごとノエルを抱きしめた。

九月

夏が終わり、そろそろシャンゼリゼ通りのマロニエの葉が黄色に色づくころ、E F F O プレジデント 最高責任者クリストフ・デルフィートは、アメリカへと旅立った。

今回の訪米の目的は、レーガン大統領をはじめとする政財界を代表する人物との会見と、

国連総会での演説である。

各国の元首、閣僚たちにもじって、フランスの国会議員ではなく、あくまでE F F O 最高責任者として演説することが可能になったのは、E F F O 情報部長ルディアン・ライツとE F F O 北米局長兼財務部長ハロルド・ジョンサンらの尽力によるものだった。

ワシントンDCへ向かう飛行機の中で、プレジデント・デルフィートに同行したE F F O 幹部会付き職員のリチャード・ケン・オーツが尋ねた。

「プレジ、情報部長が今、どこにいるかご存知ですか？」

「いや、知らん。ニューヨーク支部に問い合わせればわかるだろう。ルディアンがどうかしたのか？」

「あの人は、今回のプレジの警護を全部、僕に押しつけて行ったんです。パリでだってテロが相次いでいるときに…」

「俺はまだ、暗殺を狙われるほど大物じゃないぞ」

プレジデント・デルフィートは、ル・モンド紙を繰りながら答えた。

「現時点でのリスクは、暗殺じゃなくてスキャンダルです！ 今回の国連演説だつてずいぶん挑発的で、その筋からは一層、目をつけられるようになるに決まっているのに…。スキャンダルで政治生命を失った政治家は腐るほどいるんです！」

ルディアンがヒューストンで拾って、E F F O に入れたこいつは、最近、すっかり口調までルディに似てきた。

「おまえは、俺の身辺警護を命じられただけだろう。俺のプライベートについてまで、心配することはない。それは俺の責任だ」

「はあ、でも…」

「自分の責任外のことまで気に病むな。そのうち胃に穴があくぞ」

機内に、到着を間近に迫ったことを知らせるアナウンスが流れた。

ワシントンに到着すれば、アメリカのE F F O 関係者のほか、ハロルドの上司のポール・ボルカーFRB議長、ポインデクスター大統領補佐官、デクエヤル国連事務総長、そしてレーガン大統領らとの矢継ぎ早の会談が待っていた。

クリストフ・デルフィートの国連演説の前日、E F F O のスタッフは総出で最後のリハールを行つた。

「少し速い。もう少しゆっくり話した方がいいです」

「hの発音が今ひとつ明確でないですね。エルプでなくヘルプです」

スタッフはそれぞれアドバイスを飛ばしながら演説パフォーマンスを仕上げてゆく。

「ビデオテープを自分で見てみるといいよ。欠点がよくわかる」

「ルディアン！」

デルフィートは非常口から入ってきた黒髪の男に声をかけた。

「や。仕上がり具合はどう？」

ルディアンは演台まで近づき、デルフィートの掲げた右手を手のひらで軽く叩いた。

「ごらんのとおりさ。練習のやりすぎで、声がちよつとおかしい」

デルフィートの声は風邪のひきかけのように少ししやがれていた。

「無理に大声を張り上げる必要はないさ。抑揚がはっきりしていれば、充分迫力がある。草稿は覚えた？」

ルディアンが演題においてある演説草稿をのぞきこんだ。

「ああ。もう何十回読んだことか。いささか内容に飽きてきた」

「ところでさっきの一節は変えるか削るかした方がいいんじゃないのか？」

「どこだ？」

『現在、人類社会は、共通のシステムwお必要としている。正当な選挙によって選ばれた代表で構成される実効力ある世界政府なしに、これらの問題解決を…』「ここだよ」

「だが、これはE F F Oの基本原理だぞ」

「だからだよ。明日の君の演説を聞くのは、拒否権にしがみついた大国か、でなきゃ『正当に選挙』されずに権力の座にある政治家たちだ。またもに選挙が行われている国が国連総会の議席の何割を占めていると思ってる」

「わざと挑発的にしているんだが」

「いたずらに彼らを敵に回すのは得策じゃない。いかに彼らに痛みを感じさせずにE F F Oを成功させるかが問題なんじゃないのか？」

ルディアンがいつものように齒に衣を着せぬもの言いをするのを見て、デルフィートは少しほっとした。親友のラヴレンティースヴェルドロフ中佐が死んで以来、内面を見せないようにしていたものの、ルディアンは堅い表情しか見せなかつたのである。

「そうだな。少し変えよう。…ところで、

おまえは何でここにアメリカにいる？」

デルフィートは草稿に手を入れながら聞いた。

「君の演説を聞くために決まってるじゃないか」

「そんなもの、後でV T Rでも見る！パリの本部をほったらかしにしゃがって」

ルディアンは、スパイ事件に絡んだ駐米ソ

連大使館国外退去の件で来ているのだと言いかけたリチャードは、口を出すのをやめた。これはこの二人高齢の「犬も喰わないなにか」なのだ。

「マギーとエリザベートが残ってるよ。クリストフ・デルフィートの国際的初舞台デビューを見逃すなんて手はないと思う」

「ルディアン……！」

プレジデント・デルフィートは本気で怒っている。ルディアンは、デルフィートをリラックスさせに来たというよりは、単に野次馬根性丸出しで面白がっているだけなのだ。

翌日、ニューヨークは雲ひとつない上天気だった。国連本部の総会会議場には、千三百人近くの聴衆でほぼ満席となった。E F F Oスタッフの根回しでマスメディアの取材は普段より多い。午前一〇時四〇分、ついにデルフィートの演説が始まった。

「現在―我々は、現在の世界システムでは解決困難な課題を山のように抱え込んでいます。紛争は第二次大戦以後も常に絶えることなく続き、核兵器は、地球を滅ぼしてなお余る数で存在し、南北間の経済的格差は年々広がる一方で、酸性雨、森林破壊、大気・海洋汚染などの国境を越えて発生する環境問題など、このままでは数十年後の人類の未来を危ぶまざるを得ないほです。

誰もが、五万発もの核ミサイル保持など、馬鹿げているとわかっている。にもかかわらず、核軍縮交渉は延々と十年以上も続きながらミサイルを一発も減らすことができなかつたのか。――言うまでもない、それは相手に対する不信と、自分たちの安全の保証が得られないからです。

世界各地で生じている紛争や人権侵害をど

うして我々はなくすことができないのか。

原発事故によって被害を被っても、国境の外側にあるというだけで、なぜ我々は補償を請求できないのか。

これらの問題は、現在の国家システム 主権をもった国家が、群雄割拠のごとく林立し、それらが国際連合という頼りない寄り合い所帯しか持っていないことから生じています。事務総長を始めとする国連関係者の尽力にもかかわらず、現在も紛争と貧困は世界じゅういたるところにはびこっています。我々は、このまま自分たちが生存できるのか怯えて、その問題の大きさ重さから目をそらし、忘れたふりをして生きて行くことしかできないのでしょうか？」

デルフィートは、一息おいた。

「我々はこのに、世界連邦設立のための具体的なビジョンを示します。

第一に、国連総会において過半数の支持を得て、国際連合に世界政府としての機能を持たせること。

一つ、核兵器は全廃する。通常へ一機についても段階的に削減し、最終的には警察力のみを残すものとする」

会場がざわつとした。あちこちで嘲笑が漏れる。これらは国際連合が四〇年間、模索し続けてきたことだった。そして国際政治のパワー・ポリティクスの前にあえなくついでてきた理想だった。

デルフィートはかまわず続ける。

「一つ、この世界連邦システムの細部は、E F F Oで、あるいは他の機関でさらに検討中だが、二院制の議会と、行政機関、司法機関および安全保障のための組織を置く。

一つ、現在の国家は、自治政府として、引き続き行政権の大部分を受け持つ。あるいは、現在の国家単位よりさらに小さな地方自治体、

あるいは国家単位より大きな国家のグループがこの役割を果たす場合もあるだろう。

世界連邦政府は、国連憲章を母体とした、基本的人権と民主主義、法のコントロールに基づき、構成員の意思をシステムティックに政策に反映させる政治体制となるものである。一つ、連邦政府の予算は、原則としてそれまでの各国の軍事費の八割程度とする。

一つ、連邦政府は、コミュニケーションを円滑にするため、共通語を定め、第一外国語として義務教育その他の場において普及を図る」

クリストフ・デルフィートはそこで一瞬間をおいた。会場内はしーんと静まりかえって彼の顔を凝視している。

「これらの目標は、国際連合が設立されたときの、国連憲章に記されている理念と本質的に同じものです。われわれはまさに、国連憲章の理想を紙に書いてあるものではなく、現実のものとするために、動いています」

もはや、広い国連総会会場には、デルフィート以外に動くものはなかった。

「南北問題、環境破壊、人口、エネルギー問題など、世界政府が設立されてもなお、解決が困難な問題は数多く存在するでありましょう。しかし、世界政府が存在しないよりも、存在する方が対処が簡単になることは、容易に想像ができるのです。

必要なのは、各国の、そして各国を構成する人々、つまりあなたの支持であり、力です」クリストフ・デルフィートは聴衆へと手を差し伸べた。そして縁談をはなれ、マイクをもつてゆっくり歩き出す。

「何もしないで漫然と、きのうと同じことをして生活をおくることはできません。だがそれでは、自分で自分を殺しているようなものだと思いませんか。

二十世紀後半の、今の時代を生きているという点で、わたしたちは一人の例外もなく共通点をもっています。

一週間に一時間でいい、世界のことを考えてください。一カ月に一ドルでいい、有効なことにお金を寄付してください。イベントに参加し、イベントを開いてください。

関心を持ち、知識を広げてください。そして考え、話し合ってください。

選挙のとき、考慮に入れてください。E F F Oは、各国議会でも多数派を形成することによって国連総会での可決を目指します。

E F F O員に協力してください。E F F O員になってください。

あなたにできることを、できる範囲でお願いします。

われわれを夢追人と呼び人もいるかもしれませんが。しかし、夢を見、負わなければ、夢が実現することもないのです。

あなたが力を貸してくださいれば、夢は現実となるでしょう」

最後の言葉が響き終わった瞬間、拍手が鳴った。うねり立つ嵐のような拍手。まるで世紀のオペラのカンツォーネか、聴衆を桃源郷に誘うオーケストラの長い長い交響曲が終わった瞬間のような拍手がわいていた。

次に演説する順番で控えていたデンマーク首相も、議長のパキスタン外相も、デクエヤル事務総長も、最善席を占めていた各国首脳も残らず拍手していた。

議事進行係も、照明係も、その場に居合わせた国連の職員たちも拍手していた。

ルディアンも拍手していた。デルフィートが拍手の渦の中で演壇を降り、やはり同じく拍手しているE F F Oのスタッフたちに近づいてきた。デルフィートが自分の方に来るのを見たルディアンは、満顔の笑みを浮かべて、

デルフィートの肩を叩いた。

「とてもよかった。上出来だ」

デルフィートは何もいわず、ルディアンの手を握った。そして驚いたルディアンがデルフィートの顔を見上げる間もなく、拍手し続ける各国代表のなかへ分け入っていく。

デルフィートの手のひらは、脂汗出じつとりぬれていた。

場内の拍手はその間も鳴りやまず、怒涛のように長く長くなり続いていた。

九月

プレジデント・デルフィートの国連演説はマスメディアへの根回しが効いたこともあって、予想以上の反響を呼んだ。E F F Oもプレジ個人も、ヨーロッパではある程度知られていたが、それ以外の地域では知名度が低かった。それが、百六十八カ国の国連加盟国のほとんどの元首、閣僚クラスまたは大使がE F F Oの世界連邦設立の具体的構想を知ったのである。

翌日の新聞記事には、設立から四年の間に会員が三百万人に上っていること、各界の政界・財界・学会等の第一人者が多数参加しており、プレジデント・デルフィート自身、将来の有力なフランス大統領候補であることなどが掲載され、E F F Oに関する情報は（かなり恣意的に）尾ひれをつけて広まった。そしてプレジの演説時の妙な感動の嵐とあいまって、各国首脳はあらそってプレジとの会見を求めた。

この時の国連代表部では、「自国の代表がクリストフ・デルフィートに会ったがどうか」が、もっぱら話題になったという。こういう

ミーハーな盛り上がり仕掛け人が情報部長

ルディアン

だということは、E F F O公然の秘密だった。

とにかく噂が噂をよび、プレジはアメリカ滞在を延長して百カ国以上の代表と会談を行った。そしてE F F Oについての同じ説明を続けた。

ほとんどの会談に同席したりチャードは、時々「E F F Oのパンフレットでも読んでください！」と叫び出したくなったが、プレジデント・デルフィートは辛抱強く、百何人目の会談相手の同じ質問に答えていた。

そして一週間して会談申し込みの長蛇の列が一区切りついたとき、クリストフ・デルフィートは、世界的に有名になっていただけではなく百数十カ国に知己ができていたのである。

さらにその一週間で、七つの支部、四十九の出先機関、三十八人の新会員（つまり首脳たちだ）が決まった。E F F Oのブランチは一挙に二倍近くに増えたのである。

八日後、リチャード・ケン・オーツは「政治家は体力だ」と言い残して丸二日寝込んだ。プレジデント・デルフィートは満足し、元氣だった。

十月

「プレジ、クレムリンからです」

「ん」

彼の国連演説から二週間たったある午後、パリE F F O本部幹部会執務室で、プレジデント・デルフィートは受話器を取った。

「ムッシュ・デルフィートですか？」

「ええ」

「ミハイル・ゴルバチョフがムッシュとの会話を希望しております。今、お時間はよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

デルフィートは、椅子の上に座りなおした。まずゴルバチョフの肉声の流れ、続いて通訳のフランス語が入る。

「ムッシュウ・デルフィート、ほかでもないルディアン・ライツ氏のことだが……」

「スヴェルドロフ中佐の後任に、というご意向は聞いています。その権については、本人の意思次第だと考えています」

デルフィートの言葉は心なしかいつもより少し冷たかった。デルフィート自身、ゴルバチョフには好感をもっていた。超大国の一方にようやく話のわかる相手が現れ、現実的な目で政治を行い、かつ一片の理想を失わぬ姿には、ともに世界を立て直してゆける相手だとも思っていた。だが、今回はこれくらいくども交わされるであろうゴルバチョフとの確執の最初の一步となるだろう。

ルディアンを手放す気はなかった。今まででさえ、どこをほっつき歩いているかわからなくて困っていることがしょっちゅうだというのに、泥沼のソ連に足を突っ込んだらどうなるかわかったものではない。何のかの言っても、E F F O情報部はルディアン一人で作くり、ルディアンが動かしていた。あいつがソ連に行きつばなしになったら、誰がE F F O情報部を率いるのか。こっちだって困る。

「ムッシュ・デルフィート、私は無制限に彼を縛ろうと思っているわけではない。ごく短い期間、あなたから貸していただきたいだけだ」

聞きなれた、めりはりのある書記長の声。

「ルディアンは私の所有物ではありませんが」

「だが、E F F Oの一員であることには違いない」

「……」

「彼がソ連国内に留まる必要はない。思い起こしてほしい。スヴェルドローフ中佐も年の半分はフランスやその他外国に滞在していた。その後任となれば、彼も同じような勤務状況となるだろう」

「しかしフルタイムとなると…あればE F F Oに欠かせない人間なのです」

「それは十分承知している。我々はE F F Oと不仲になることは望んでいない。だからそう、例えば月の半分をこちらで仕事してもらい、後の半分をE F F Oで働くなど、方法はあるだろう」

「しかし、ご存知でしょうが、あいつはずでにスイスで調査会社を経営するなど、今でも多すぎる仕事をかかえています。実際問題として、時間的、体力的に難しいと思わざるをえません」

「人間、何をしても忙しいときは忙しい。時間などその気になればつくれる。何がより重要なかがわかっていれば」

「…ペレストロイカが大変重要なことはよく理解しています。しかし、われわれの目的もそれ以上に大切なのです」

「私の考えは違う、ムッシュウ・デルフィート。私たちの目的は、結局、同じものだ。だから、君たちの目的のために、彼の力を貸してはもらえないか。もし、それがかなえられるなら、われわれもE F F Oに対し相応の協力を約束する」

「……」  
「ムッシュウ、君となら外交や交渉の面で多く協力しあえる場面があるだろう。君個人にとっても」

「……書記長、私個人がフランスの一政治家として、書記長の協力を得られるメリットより、E F F Oが情報部長を失うデメリットの方が大きいと判断せざるをえません」

ゴルバチョフは一瞬、返事につまった。

「失礼なことを言った」

ゴルバチョフは素直にあやまった。

「書記長の申し出を受け入れるか否かを判断するのは、ルディアン自身です。あれが承知するのなら、私は何も言いません」

二人はそれから挨拶をして電話を切った。デルフィートから本人の承諾があれば反対しない、という言質を得て、ゴルバチョフは満足した。

受話器を置きながら、デルフィートは、ルディアンは承知しないだろうと考えていた。

あいつは何のかのといっても、既成の組織に縛られるのをひどく嫌がるのだ。

十月 二

十月十一、十二日両日、アイスランドのレイキヤビクにおいて、米ソ首脳会談が開かれた。会談は米戦略防衛構想(SDI)をめぐる紛糾し、時間を延長して続けられたが、何ら合意のなされないまま終了した。

首脳会談から一週間後の週末、ルディアンはモスクワ郊外にあるゴルバチョフの別荘<sup>イェチヤ</sup>に呼び出された。ルディアンが予期した通り、ゴルバチョフは、SDIについて米国を説得する方法を知りたがった。

「私なら、ソ連のSDI そんなものがあるればですが、その進行状況についての情報をわざと流しますね」

森を抜け、湖に面した小道を歩きながらルディアンは答える。

「君が、かね」

「いや、しかるべきルートを通じてです。

<sup>モノ</sup>情報は本物である必要があります。ソ連軍内

の西側スパイを通じてCIAに伝われば。今のソ連のハイテク状況を知れば、アメリカは脅威とは思わないでしょう」

「どうしてそうしなかったのだ」

意気込んで言う書記長に、ルディアンは困惑しながら答える。

「書記長、私はその方法はわかりません。でも具体的に誰がその担当であるかは知らないし、各地に散らばった情報を集める術もありません」

「……ライツ君、前にも申し出たことだ

が……」

「——その件ならお断りしたはずですよ」

「だが、考え直してみてくれたまえ。あのときは状況が変わった。われわれはスヴェルドローフ中佐を失ったのだ」

ルディアンは澄んだ緑の瞳が鋭く光った。ゴルバチョフは臆せず続ける。

「ガスパージン、私はソ連を変えるつもりだ。ソ連にも、そして世界にも大きな改革が必要だ。その端緒として、近いうちに政治局員の任期を決める。おそらく一期五年、二期までとなるだろう」

ばたばたと水音をたててマガモの一群が湖に降りた。降った。

「つまり、私が書記長の座にあるのはせいぜい一〇年だ。君はまだ充分すぎるほど若い。一〇年でもいい。君の時間を私に貸してもらえないだろうか」

ゴルバチョフはルディアンと正面に向き合った。

「私一人が加わったからといって、ペレストロイカが成功するというものでもないでしょう」

ルディアンは、ゴルバチョフの視線をそらして言った。

「だが、スヴェルドローフ中佐がいたなら、レイキャビクでは何らかの合意に達することができたはずだ。成功するか、しないかを決定するのは常に紙一重の差なのだ。君なら充分、その役割を果たせる」

「……私は、E F F Oの責任ある地位におります」

「クリストフ・デルフィート氏は、君次第だと言った。これは君自身の問題だ」

風に驚いた水鳥が、二人のすぐ近くから水色の空へと飛び立った。

「……しばらく時間をください」

「あまりたくさんは待てんよ」

書記長は、ゆっくりルディアンに背を向けて別荘へ戻りかける。

遠くに列車の汽笛。ルディアンは一瞬、ドニエプル川支流のそばにいる錯覚に陥った。

湖の空気は、ラーヴリヤの死んだ川と同じ匂いがした。

十一月

パリの並木道の枯葉もあらかた落ち、冷たい風が吹き始めた。ラーヴリヤの後任となつて正式にK G Bに入るためには、ルディアンは複数の組織とかけ合う必要があった。

ゴルバチョフと会った後、一カ月がかりでそれらのめどをつけたルディアンには、もう一つの難題が残っていた。

「十二月で籍を抜きたいんだが」

「え、どうして？」

パリのアパートで、ノエルはルディアンに唐突なものいいに危うくシェロドを床に落としそうになった。赤ん坊は火がついたように泣きだす。

「前から話はあったが、ラーヴリヤの後任

として、モスクワで働くことにしようと思う」  
ルディアンは、ノエルから受け止め、腕のなかでゆすってあやす。やがて赤ん坊は静かになり、ルディアンはベビーベッドにそっと降ろした。

「E F F Oをやめるの？」

ノエルが聞いた。

「いや、やめるつもりはない。ラーヴリヤもしよっちゅうパリに来ていたし、行き来できるように取りはからうつもりだ」

「そう。じゃあ、いいじゃない。今までとあまり変わらないわ。少なくとも私にとつては」

「だが、書類上の問題として、ラーヴリヤのポストは、本人も配偶者もソ連国籍でなければならぬんだ。一年前の約束もあるし、このさい、籍を抜くほうがいいと思う」

一年前、ノエルが妊娠したことに気がついたとき、生むかどうか迷っていた彼女に、ルディアンは一年間だけ結婚しないか、と申し出て二人は結婚した。

シエロードが生まれたとき、父親はルディアンではなく、以前付き合っていた男性だとノエルが告げてからも、二人はそれまで通り生活しつづけてきた。

「私たちもモスクワに行く、というの？」  
ノエルの問いに、ルディアンは首を横に振った。

「いいや。ラーヴリヤは消されたし、しかもK G Bの一部には、ラーヴリヤ殺害の疑いを僕に向ける者もいる。その渦中に飛び込んでいくことになるんだ。連れてはいけない」  
「おとなしくシエロードとパリで待ってろって言うのね」

「ごめん」

「……いいわ、サインするわ。でも、これは紙の上のことだけなの？」

「それは君次第だ。僕のわがままで行くのに、君に待っているとは……」

ノエルは伸びあがって自分の唇でルディアンの口をふさいだ。

「それ以上言ったら怒るわよ。……ちゃんと連絡を入れるのよ」

「そうする」

ルディアンは彼女をそっとベッドの上に押し倒した。

十一月 二

「なっ……、応じるつもりはないとおまえは言ったじゃないか」

深夜のE F F O幹部会執務室で、デルフィートとは思わず声を荒だてた。

「ごめん。あのときは事情が変わった」

ルディアンは、静かに言った。

「俺に黙って決めたのか」

「ソ連側には、まだ話していない。君が認めなければ、この話は宙に浮く」

「俺は反対だ。おまえがソ連に行って得られるメリットより、デメリットの方が大きい」  
「ソ連を変えなきゃ世界は変わらない。逆に言えば、ソ連が変われば世界はずいぶん変わる。アフガニスタン、イラン・イラク、アングラ中米 今、生じている紛争もほとんど解決できるだろう。国連安全保障理事会も、ずつと機能しやすくなる」

デルフィートは表情をゆるめない。

「今、ソ連は歴史的な転換をとげつつある。どこまで変わるか、底が見えない。ゴルバチョフにはしっかりした情報網と工作機関の支援が必要だ。軍縮、安全保障、貿易、投資、移民、自由な報道……、どれひとつとってもこれらなしにはできない。ゴルバチョフには『手』が必要だ。頭だけじゃなにもできない」

「……俺にだって必要だ」

「デルフィート、ゴルバチヨフと僕より、君と僕の方が目的は近い。僕はソ連の国家的利益にはさほど関心はない。国家の存在にもこだわらない。大事なのは人々が何を望み、必要としているかだ」

「ノエルとシエロードはどうするんだ。連れて行くのか？」

「いや、形だけ離婚してパリにのこしていい。もともとシエロードのために期限をつけてした結婚だったんだ」

「なっ」

ルディアンは言葉を続ける。

「デルフィート、ラーヴリヤがいなくなつて、方針を変えなきゃならない。ラーヴリヤに代わる人物を探すか……。どっちみちソ連を引き込むしかないんだ」

「俺には、ラヴレンティが本気だったのはペレストロイカであつて、E F F O でなかったように思えるが」

「ラーヴリヤがE F F O についてどう考えていたかはわからない。でもラーヴリヤはペレストロイカに本気だった。危険なことは十分知った上で、今のままではダメだと思つていた。そうした危険を自分の身体にのみこんで、そして逝つた」

ルディアンが水割りの入ったグラスをテーブルに置いた。なかの氷がからん、と音をたてる。

「僕は、ラーヴリヤに応えなければならぬと思う。少なくとも僕が先に逝つたときに、ラーヴリヤがE F F O のためにしたであろうぐらいには」

デルフィートには理解しきれないかもしれないが、ルディアンはラヴレンティを信頼していた。それはルディアンのラヴレンティに対する信頼であり、自分に対する信頼でもあ

つた。自分を信じることができなければ、人を信じることもできないだろう。人の信頼に依らずして、人を信じることもできないだろう。

「ラヴレンティは殺されたんだぞ！ そんなところへおまえをやるか！」

デルフィートの拳がテーブルを叩いた振動で、グラスが倒れた。

「そう、ラーヴリヤは殺された。ゴルバチヨフに手が伸びるのも時間の問題だ。デルフィート、僕は行きたい。それが理由だ」

「ルディアン！」

二人は、仇敵同士のように睨み合った。しかしすでに勝負はついていた。倒れたグラスから琥珀色の液体がテーブルの上をすべり、床へこぼれてゆく。

暖炉で薪がはじけた。インペリアル・ルームのなかにほかの音はない。

デルフィートが目を伏せ、ひたいを手のひらでおおった。

「おまえは……！」

デルフィートを見るルディアンの眼がやわらいだ。

「ごめん、デルフィート」

「勝手にしろ、この馬鹿が。……だが必ずここへ戻ってこい」

「了解」

「……これでおまえが遠くに行つてしまふような気がする」

ドアを開けて部屋を出ていきかけたルディアンは、デルフィートのつぶやきを聞きとつた。

「僕が行くのは、君に近づくためだよ」

はつとしてデルフィートが顔を上げたとき、ルディアンの姿は、ぱたんと閉められたドア

の向こうに消えていた。

四季節・終わり